

木岡悦子 ○堂ヶ崎優子 西本真紀子 (京都女大)

【目的】 幼少期における母と子の関係を衣生活の視点から取り上げ、女子大生の意識調査から、当時の母親のイメージがその着衣と関わって、どのように意識されていたかを明らかにするとともに、少子化の今日、わが子のための衣服の調達・管理等の衣生活行動がどのようになされているのか、その現状を捉え、母子関係のあり方について考察を加えた。

【方法】 K女子大生137名、N女子大生113名(18歳～21歳)を対象に、幼少期における母と子の衣生活に関する記憶および現在の本人の衣生活行動について、アンケート調査を行った。対象者の当時の家族構成は全体の33%が三世代家族で、他が核家族であった。また、0歳から7歳の子どものを持つ母親を対象に、子ども服の調達・管理や母親自身の衣生活に関して、留置法によるアンケート調査を行った。これらの資料を用いて、母と子の衣生活行動に関して基本集計、クロス集計を行い、検討した。

【結果】 印象に残っている母親の服装は「ブラウス・シャツとスカート」が第1位を占め、母親の「家にいるとき」の姿が最も印象深いという回答が、K・N女子大生に共通して見られた。印象に残る母の服の色・柄と「あたたかい」、「行動的」など、母から受けた服装像の関連性が認められた。子ども服の調達についての母親の回答から、子ども服を選択する際に「重視する」項目は「サイズ」、「色・柄」、「着脱のしやすさ」が挙げられ、機能性を重視した調達傾向があることがわかった。衣服の調達や管理についての項目と母親の年齢とをクロス集計した結果、母親の年齢層別に有意な差が認められ、若い母親ほど子ども服に流行を取り入れようとし、修理する割合が低い傾向があった。